

身延山と其名見れ、而も 聖祖の十間四面の御草庵は鷹取の麓にありしかり、鬱蒼たる老樹を見れば、そゞろに六百餘年の昔『北は身延の嶺天を戴き、南は鷹取が嶺雲に續き、深山おれば、晝は日を見奉らず夜も月を詠むることおし』と 宗祖御在世當時を偲び奉られ又『後には峨々たる深山聳えて梢に一乗の果を結び、下枝に鳴く蟬の音滋く前には湯々たる流水湛へて、實相真如の月浮び無明深重の闇晴れて、法性の空に雲もおし。然れば吹く風もゆるぐ木草も流れ水の音まで、此山に妙法五字を唱へずと云ふことなし』の文を拜せば、身延の山のみに限らず鷹取山の木草も俱に、深くく聖祖の『晝は終日一乗妙典を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲』に接し有情悲情悉皆成佛の果を証得し、梢には一乗の果を結び居るならん、東麓には蓮華瀧あり、其處敷町下は、身延の總門にして、聖祖波木井公の對面石の古跡あり、山名異と云へども、身延山と俱に彼山も亦靈山の一分を成すと謂ふべし、身延川を隔て、相對聳せる彼山を

徹せば、延山風光亦平影を失せん歟、身延の山は聊か高く鷹取は少しく低し、兩者恰も姉妹の間にあるとを、又身延山を靈鷲山に擬すとせば、彼の山は鷹取山と言ふを以て、自ら両山鷹鷹の關係あるものゝ如し。これ両々鳥中の勇あるもの、是萬岳に秀る表象歟。

鷲の山風ゆきこふて 絶へぬ御法の六百年
前に鷹取聳へてぞ 御山の深さいやましぬ

春 曉

森 亮 遠

ぬれてもねまし花のしづくに、とむかし人のいひけん、春の夜もやうくにしらみわたりぬ、よろづ、ねぼろの夜よりぬけ出たるやうにて、東の山、白さうす衣うちかつぎて、まだ夢さめやらぬ様いとわかし。せんさいの花、たゞほの白く打かすみて、そこともわかぬ下かげに下りたつれば、鳥の羽ふさか朝風にか、ほたりと、我が袖に落つ

るは花の下つゆにかあらん。身にしむばかりの匂ひも、春はなかくゝにあかつきたきこそ樂しけれ

花の枝のしづくにぬれてむら鳥の

むら鳴くこへに夜は明けんとす。

望める悲哀

雪 二 生

我が心は冬枯の荒原にも似て、荒び果てぬるが是非なけれ、いら立ちたる精神は苔蕩百花悠艶の春も欲せず、昂ぶりたる神經は、佳人の膝も願はんとは欲せず、狂ひし駒の奔り躍るが如くに見る物を破らん、聞く物に腹立てんとあわれにも萎ひつゝ怒る、はかなさよ。

かく迄荒れにし我が心の、さてもわかき極みなる哉。酒に酔ひてや、斯の狂を致せる、將た罪惡の應報にてや、斯程の態を演せる、否々皆あらじ、うつし世多くの人どもの、我を苛むるあり、惡辣なる社會の我を虐ぐるあり。なごかよわき一

夫を打ち据えて悲嘆せしむるが、されど、或人謂ひぬ、私の苦しむは世の罪ならで皆己が爲せる業ありと、さるにても己が繩もて己が身を縛り合へる罪の恐しき哉。

浮世の姿とは謂ひつれ、金も女も尽なる世界ならずや、御佛は、なぞ人知れぬ煩悶の底に我を置き玉ふが。まこと御陀は大悲にましますか、さても不思議の極みや。

なご、草々の事思ふに付けても、我心の愚かにして慈佛御前に、ぬかづき得ぬ我こそ重ねゝの不幸ありけれ。(完)

元 旦

竹 鶯 (早川)

雞鳴報曉曙光新

瑞氣搖蕩萬象春

四海東風聖恩遍

椒杯獻壽大平民

延山曉雪

驚看積雪白埋堂

月落鳥飛逐曙光

五嶽八溪人不見

誰先來拜薦薰香